

Y3-35

病院5Sの推進について

武蔵野赤十字病院 5S支援チーム

○藤原 範子、矢野 真、高桑 大介

【目的】 当院における5S活動は、今年で4年目を迎えた。これまでの取り組みと病院5Sの特徴について概況を報告する。

【概要】 平成17年度民間企業から外部講師を招き勉強会を開催した。組織横断的に活動する「5Sプロジェクトチーム」を立ち上げ、暗中模索のうちに院内活動を開始した。年2回発表会を開催し、平成20年11月までに院内全部署の取り組みを終えることができた。現在は外部からの見学者も増え、プロジェクトチームは活動を支援する「5S支援チーム」となった。

【成功理由】 1.発足当初から病院幹部がメンバーに入り、進捗状態を見守ってきた。2.5S活動を単に美化運動にしないよう心がけた。3.全員参加を原則とした。4.支援チームが各部署活動のプロセスを支援することとした。5.活動しやすい戦略をたてた。6.表彰制度により競争原理が働いた。7.各部署に推進リーダーを配備し、現場での取り組みを水平展開した。8.支援チームそのものが意欲的である。9.清掃基準などの作成により維持するしくみが出来上がった。

【病院5Sの特徴】 安全が最優先される。顧客の評価が得にくい。職種を超えた組織であり協働作業が必要。

【効果】 1.NICUでは不要な物品を廃棄したことで、患者数に合わせた安全なスペースが確保できた。2.指定席化により取り間違いを防止するとともに、無駄を省き業務の効率化を図るという5S効果が病院全体に広がった。3.透析、放射線科、MEでは、機器が最善の状態で使用できるよう基準を策定し、常に安全、清潔を保持している。4.感染防止のための取り組みとの相乗効果。5.患者の視点を大切にしながら、職員が働きやすい環境を確保できるという業務改善につながっている。6.放射線科では、医師をはじめとして各職種の参加があり、お互いにルールを守ることで円滑な人間関係を築けるようになった。

Y3-36

院内暴力について考える～全職員対象のアンケート調査を実施して～

芳賀赤十字病院 医療安全推進室

○馬込 公子、田中 薫、稲澤 正士、

岡田 真樹

【はじめに】 当院は栃木県の東部に位置し、1市4町の地域住民15万人余りの急性期医療を担う中核拠点病院である。今保健医療の現場では、勤務する職員に対する暴力行為（身体への暴力、脅威、威嚇、暴言など）の増加が問題となり、この10年間で看護職員を中心にその実態と影響などについて報告されるようになってきた。また暴力対策のガイドラインが国内外で示され各職場においての対策推進が求められている。そこで当院の院内暴力対策の強化を図るため、現状把握を目的に全職員を対象にアンケート調査を実施したので報告する。

【方法】 全職員517人を対象に、職種、当院における経験年数、これまでに患者、家族から身体的暴力および言語的暴力を受けたことがあるか、そしてどのように対応・解決をしたかなど、10項目について聞いた。

【結果】 回答は435人、84%であった。内訳は、医師23人、看護師262人、診療支援部門63人、事務など87人であった。暴力を受けたことがあると答えた回答した職員は207人50%におよんだ。特に看護師は62%と高値であった。暴力を受けた相手は患者ばかりではなく家族からの暴力、暴言、威嚇がそれぞれ20%程度であった。身体的暴力の内容では、「叩かれる」「蹴られる」「唾をかけられる」など、遭遇した職員の身体的・心理的ストレスは大きい。また被害を受けた看護師の回答で「患者だから仕方がない」「自分が我慢すればいいから」とその感情をうちに秘め、被害を受けたものの感情が表現されておらず、我慢している実態も明らかになった。

【まとめ】 今後、報告制度の見直し、院内教育の実施など、組織的取り組みが必要であり、現在段階的に実施している。